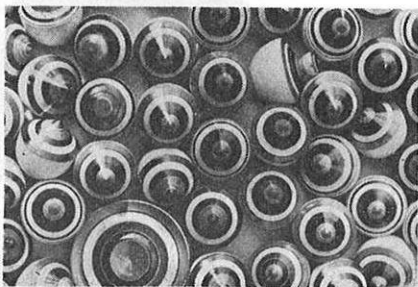


# 随想



## 書のこころ

井田峰月

日展の出品は終わった。血のにじみ出る様な幾日かを過ぎたきよう、やっと帰途につく汽車の中である。

窓ガラスに映える夕日は美しい。あすのなききようと思つて、制作に打ち込んだ数日がある。一日の如く脳裡を走る。

出品してすぐ帰る予定で京都に行ったのに。下見して残されたのは一カ月も前に書いた作品であった。それから随分紙も使い墨も使った。しかし思う様にはなかなか出来ない。持つて来た紙は使い果たし、気ばかりあせる。先輩の方に分けてもらった紙も早や残

り少ない。もうこれ以上は出来ない。しかし師匠はやはり前の加工紙に書く様に言われる。切符の払い戻しに出かけては帰りに紙買いに廻る。雨の日の夕暮を、店をたずねてかけ廻る姿は我ながらあわれであった。

日展の制作ならず今日も又旅館の冷えし夕餉とりをり  
一夜書いて、今日こそは帰ろう。  
と見てもらったが、やはり前のが残るのである。明日は帰りますから。

私の使っている和ろう箋は鳩居堂にはあるのである。然し係がいないとか、倉庫にしまつてあるとかでなかなか出してくれない。馴れぬ土地での悲しさをつくづく感じながら、その紙はあきらめることにした。その矢先、紙を買いに行こうかな。との先生の言葉に、私の心は動揺した。

一応いとまごいをして旅館へと帰ったが、しばらくはじっとして考えた。そうだ。ここまで来たのにこのまま帰つてもきつと後悔するだろう。落選しても思い残すことのない様に、とことんまでやってみよう。そしてあつかましくも先生に電話をして、紙二十枚をお願いした。

三カ月以上も首の治療をしていられた先生が、ろう紙のずしりと重いのかついで表具屋まで来て下さった時は、有難くて声が出なかつた。頑張りますと心に誓つた。  
和ろう箋に向いて立てばおのずから祈るが如く筆は下りぬ

以上は二、三年前の話であるが、私は常に自分の書き馴れた紙は、展覧会のために準備する様にしている。生の紙では絶対によくない。たまたま紙屋で、古の紙で色がつきまじったので売り物になりません。使つて下さい。と言われる時程嬉しいことはない。少なくとも三年はねせたいものである。そのとおきおきの紙に、良い墨で思いのままの創作を重ねてゆくことこそ書家にとっては楽しみでもあり苦しみでもある。

ついひと月前のこと、大学の某教授から電話がかかった。新築祝に作品を頼まれたので、一時間ばかり来てくれる様にとのことである。私は、一時間では出来ないでしよう。と言つと、二、三枚書けばいいだろう。とのことであつた。私は時間を約束してお宅へ伺つた。まず硯と筆を洗つて新鮮味のある所で紙に向いたい。教授の自詠歌だけに漢字が多い。最初に私が二、三枚書いた。それから書いてもらふ。字の大小、紙に対しての散らし方、それに墨の色とむつかしい。後から書いたのが決まるといふという訳ではないが、書いてみなくてはわからぬ。三、四時間はかかつたであらう。

作品も二十枚位出来上り、その中から一点を選んだ。教授は笑いながら、やはり時間がかかりますな。と言われた。

この頃では書道ブームというか、勉強する人の数が次第にふえた。心のゆとりが出来たのか、よろこばしいこと

## あいがん犬

中川正和

である。私はこの様な人の為には一生懸命手伝いたい。私の真似はしてもらいたくない。人人に性格が進えば同じ字が出来るはずがない。  
自分の感激を託した短歌を書いた作品とする。何とすばらしいことであらう。それに自分で刻つた落款を押せば、これこそ自分独自のものである。  
(書家)

愛玩犬が静かなブームを起こしている。子供の世界は反応が早い。犬を連れて散歩している声がかかる。「おじさん!」その犬コッカースパニエルだろう。うちにもいるよ。血統証付だい」  
「この犬だつて血統証付きだぞ」  
と五十歳を過ぎたおやじが小学生の男の子をつかまえて、口をとがらせて能書きを聞かせているのだから天下太平である。しかし毛並みとか血統には私自身反感を持っている。私の祖先は立命大教授の林屋辰三郎さんが描く「京の町衆」である。骨っぽい逸話もあるが、代々町人であつたことに間違いない。名門に対するひがみである。犬のおんざいで血統証は四代前まで記載されている。人間の戸籍簿本より詳しい。朱色で記載されたのがチャンピオ

ンというから益々うれし。

ところが全身真っ黒の毛玉のようなコッカーがわが家に現れると、一家の主人たる私の地位は転落し、五代將軍綱吉時代に逆行した。ともに元禄を謳歌しているのだからよからうとすましてもおられない。まず長女がうれしそうに顔をして、ワン公の食器なるものを買って来た。銀色に光つた鈴を地上に置いて、上部をスパッと切つた物体を想像してもらえばよい。上部が細く裾が広がっている。コッカーが食物をたべるとき鼻を突っ込むと、長い両耳だけ食器の外に出る仕掛けである。

「それはいくらかね」  
と貧乏人の質問は決まっている。  
「たったゴシヤクエン」  
と長女独得のアクセントで教えてくれた。おやじが卒倒せんようにゆっくり言ったのではない。

次にガムなるものが持ち込まれた。牛の骨を「おしゃぶり」にしていたのは昔の犬で、いまやガムをかじつて人を噛まず文化犬となり果てた。ニカワと栄養剤で固めた恰色の昆布のような物で、長いと格好がつかぬので、真ん中でひとつ結んである。このガムが犬の涎で柔らかくなつた図は見られない。玄関に入つてこのガムを踏んだ押し売りが、びっくりして逃げていったことがある。まさか蛇のヌケガラと思つたわけでもあるまい。

コッカーは音楽に強いのか、わが家の犬が特別なのか、笛を吹いたりサイレンが鳴ると遠吠えする。中型犬のくせに顔を空へ向けて狼のようなドスの利いた声である。私が「斎太郎節」をうなると「音痴である」と一言できめつける妻も、犬が遠吠えすると

「賢い犬や、食事の催足してよる」と悦に入る。ばかばかりしい。午後五時になるとサイレンが鳴るから吠えるので、自明の理ではないかと思うが。悲しいかな年齢のせいとときときサイレンが聞こえない。そんなとき遠吠えされる

「いや待て待て、こいつは賢いからやがて小判の壺でも探し当てるかも知れんぞ」  
と犬が何気なく見ている庭の隅をこちらも欲ばけした顔でジーツと凝視すると、紫色の沃気が陽炎の如く立ち昇ることもある。このような損得勘定の強いおやじに犬がなつく道理がない。たまの休日、そばによつて

「お手!!」  
と言つても寝そべつてこちらをジロリと見るだけである。主人の威厳は丸つぶれで、ついに「お手をどうぞ」  
と頼むことにならぬ。主人にとってこれが本当の哀願犬である。  
(共同通信社熊本支局長)

## 初日の出

藤坂信子

新年ということばには、回春の思想があると思う。一年じゅうで一ヶ月が短い陰うつな冬至から一週間余りで、あたらしい、生き生きした時間の始まりを感じる事ができるのは何としてもすばらしい。元旦の朝のすがすがしい緊張感をわたしは一年じゅう覚えておれないものかしらと思う。

子どものころは初日の出を見守るために眠い目をこすりながら無理して起きた。オレンジ色の光の矢が東の山の端から放たれるまでの待ち時間は無限に長いように思えた。けれども朝日がうたいながら舞台上に上ってくる舞姫のように姿を現わすと、心は云い知れぬ喜びと充足感でうつつりとなるのであつた。それは生きて動いている世界、人間の心臓を象つた世界を見ることが出来た満足である。その時子どもらのかたわらで見ていた年寄りは無意識の中に自分たちは老いても青春はあのようにつながりゆくのだと感じたのではないだろうか。考えてみれば切り先を天に向けた青竹や松のみどり、真紅の露を思わせる万年青や南天の実といった元旦の飾りものの中にも春を願う人の心は象徴的にあらわされている。イン

ドの詩人、タゴールに次のような一編の詩がある。

この朝の空はばらの花々の騒ぎでふくらんでいる。  
岸の松の木は光であふれて生々と思つている。わたしの心をくまなく満して、  
わたしは感じる

この宇宙が幸福な一茎の蓮の花のようにあなたの魂の底なき湖に浮んでいるのをわたしはまた感じる——  
わたしがあなたの言葉のその言葉であり

あなたの歌のその歌  
あなたの生命のその生命であり  
闇の蕾をつき破つて万物を征服する光であるのを 八山室 静 訳

この詩は多分、詩人が天から靈感を授けられたと直感した幸福な朝の感動をうたつたものであるが、この朝を元旦の朝におき代えてみるのも面白い。そうすると、タゴールの感激と敬虔に支えられた自負とが新年を迎える人の気持ちにびたりと合つて来るのである。  
元旦は清新な平和の時であり決意の時、祈りの時である。今年も人類の理想からはほど遠い恥辱の日々を耕しながら怠りなく平和の種子をまく仕事を課題とせねばならないと思う。  
(詩人)